

文藝春秋

大型企画 令和に引きつがれた「闇」

平成アンタッチャブル事件簿

徹底討論 コロナ「緊急事態列島」/「小室文書」眞子さまの危うさ 六月号



文藝春秋



徹底討論

コロナ「緊急事態列島」

6

2021

平成アンタッチャブル事件簿

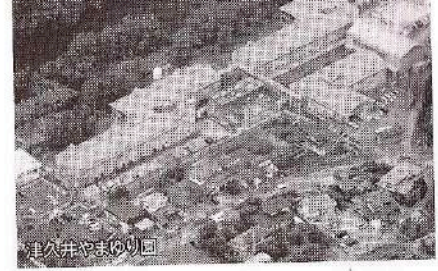
大型企画 令和に引きつがれた「闇」



平成の30年ほど凶悪事件が頻発した時代はなかった。タブーだった「沈黙のファイル」がついに開く

酒鬼薔薇 聖斗
さあゲームの始まりを
愚鈍な警察諸君
ホク止めてみれば
ホクは殺しが愉快で
人の死は見くく見く
汚い野菜共には死
積年の大怨に流血

SCHOOL KILLER 学校殺しの酒鬼薔薇



平成28年 相模原45人殺傷

植松聖の「優生思想」を生んだもの

わたはべ かず ぶみ
ノンフィクションライター
渡辺一史



なぜ彼は障害者を全否定するのか

「私は、どんな判決でも控訴いたしません！」

植松聖（31）は、横浜地裁の最終意見陳述でそう宣言した通り、昨年三月三十日、弁護側の控訴を自ら取り下げ、確定死刑囚となった。

私が、植松と最後に横浜拘置所で面会したのは、その一週間後の四月六日のことだった。月刊『創』の篠田博之編集長も一緒だった。

ら控訴を取り下げたのでもない。

「二審三審とだから裁判を続けるのは、かっこ悪いから」

彼特有の「かっこいい・かっこ悪い」という価値基準で判断したにすぎない。被害者家族が口にした「自分が犯した罪としっかり向き合ってほしい」という言葉に対しても、

「自分こそ、『心失者』は社会に必要なという事実と向き合うべきだ」と悪びれない口調でいった。

植松は、二〇一六年七月二十六日、相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で、入所者十九人を殺害、二十六人に重軽傷を負わせた。

衝撃的だったのは、彼がその施設に三年以上勤務した元職員だったこと。そして何より「意思疎通のとれない障害者」を、「心失者」という造語で呼び、「心失者は社会に不要な存在であり、不幸をばらまく元である」などと主張し続けたことだ。

篠田さんは、数々の死刑囚や受刑者らと交流し、その実像を発信し続けていた人だ。植松とも、最初に彼の接見禁止が解かれた二〇一七年以降、数十回もの面会を重ねる。

私は篠田さんとともに、植松が少しでも控訴の取り下げを先延ばしするよう説得を続けてきた。死刑が確定すると、刑場のある東京拘置所へと移送され、それ以降は外部の人との面会や手紙をやりとりする自由も

しかし、裁判では、そう主張する植松こそが、「不幸をばらまき、社会に不要な存在である」と宣告されたに等しい状況となった。彼が今後、

その現実とどう向き合っていくのか、それを見続けることは、社会にとっても大きな意味があるはずだ。「こうしてみなさんと会えなくなるのは、さみしいし、かなしいです」

植松が神妙な顔つきでいう。「この三年間、いろんな人と面会したことは、植松さんにとってどんな体験でしたか？」

私が聞くと植松は、「すさまじい価値。お金では買えない価値でした」。名残惜しそうな口ぶりであった。

珍妙な世界観

しかし一方で、その頃の植松がしきりに口にしてきたことがある。

「自分は、死刑では死ぬ気がしない。

制限されるからだ。植松と社会との接点がほぼ失われることになる。「控訴審が始まる直前に取り下げても、キミが嘘をついたことにはならないんだから。急ぐ必要はないよ」そういつて篠田さんが何度も提案したのだが、「ダラダラしてても、かっこ悪いし、潔くないんで」。

結局、植松を翻意させることはできなかった。植松は判決に納得したのでも、ましてや被害者への思いか

死刑になる前に、日本が崩壊するからです」という。

植松によると一年ほど前、拘置所の壁がバラバラと崩れ去る光景が脳裏に浮かび、それはまさに「イルミナティカード」に描かれていた予言の通りだと直感したのだという。

「六月六日か七日に、首都直下型地震で首都圏が潰滅します。だから、青森より北か、山梨より西に避難してください」——そういつて真顔で私たちに忠告するのだった。

植松のこうした妄想とも幻覚ともつかない言動は、別にそのとき始まったものではない。事件の一年ほど前から急速に彼は、「世界を裏側から牛耳っているのは、イルミナティという秘密結社の存在である」という、いわば「陰謀論」に感化されていった。最初はテレビのバラエティ番組でその存在を知り、その後ネット検索でさまざまな情報に触れるうちに

のめり込んでいったのである。

裁判の被告人質問のさいにも、彼はイルミナティについての自説をとうとうと語り、「横浜には原爆が落ちると描かれています」といった。

弁護人が、「それもイルミナティカードに描かれているんですか」。

そう尋ねると、「いえ、それは『闇金ウシジマくん』というマンガに描かれています」と答えた。

そんな珍問答が延々と繰り広げられる光景に、傍聴人も「気は確かか」と首をひねったものだった。

私たちが面会に訪れた昨年四月といえば、新型コロナウイルスの感染拡大により、最初の緊急事態宣言が発令される直前だったが、植松によると、その後にもイルミナティの存在があり、「裁判長もすべてイルミナティですからね」という。「じゃあ、死刑判決もイルミナティの意図ということですか？」

京大文学部に進学し、卒業時に小学校の教員免許を取得している。

大学ではサークルの輪の中心にいるような、いわゆる「リア充（生活が充実した人）」と呼ばれるタイプの学生だった。例えば、二〇〇八年に起きた「秋葉原通り魔殺人事件」に代表されるように、犯人がまともな人間関係や職業に恵まれず、ある意味、社会に復讐するかのようになり、こうした無差別殺傷事件とは、まったく質の異なる事件ということだ。

ところで、植松には、幼稚園時代から同じ地元（相模原市緑区）で育ち、犯行直前まで頻りに遊んでいたという幼なじみが二人いる。ここではX氏とY氏と呼ぶが、互いの両親についてもよく知る間柄だ。

植松は、父親が小学校教師、母親は漫画家という家庭に生まれた一人っ子だが、その家族関係についてX氏は、「普通に仲良かったですよ。

「うーん、それは、まだはつきりしたことはない」——彼なりの自我防衛的な心理機制なのだろうが、死刑判決をまったく別のコードで読み取っているところがあった。

植松が、東京拘置所に移送されたのは、その翌四月七日のことである。以降、植松は社会との接点を失い、ただ死刑執行を待つ身となった。

普通にいいやつ

私は、植松とトータルで十七回の面会を重ねてきたことになる。

彼と面と向かって話をする限りにおいて、病的な印象はまったく感じないのだが、彼の荒唐無稽な世界観には、正気と狂気がモザイクのように入り混じった印象を受ける。

私は、二〇〇三年に『こんな夜更けにバナナかよ』という本を書いて以来、障害や福祉を二十年近く取材

そこは自信満々にいえるけど。

一方、Y氏によると、「さと君（植松）は、僕んちに泊まりに来たときとか、人んちの冷蔵庫を勝手に開けますからね(笑)。そういうのを見て、小っちゃいなりに、あ、自己中っていうか、親から甘やかされて育ったのかなとは思ってましたね」。

小中高と進むにつれ、三人とも地元不良仲間の一員となり、やがてバイクや車に夢中になる。そして、高校三年のとき、八王子市との境にある大垂水峠の走り屋襲撃事件を起こし、仲間のほとんどは少年院で半年間を過ごすことになった。

一方、植松はタバコや飲酒、万引きくらいまではしたが、そこから先には興味がなく、襲撃事件には加わっていない。「みんなが『これ』っていても、俺はいいや、みたいな。良くも悪くもマイペース。『自分自分』って感覚でしたね」とX氏。

してきた。また、自ら介護を経験することで、本当にたくさんのことを学んできた。かたや植松は、同じ障害者の支援に関わりながら、なぜ彼らを全否定する考え方に至ってしまったのか。それを直接、彼と会うことで確かめたいと思ったのだ。

植松が、事件を起こす一年ほど前から、それまでとは異なる人格に変わってしまったというのは、私が取材した彼の友人たちに共通する証言である。また、裁判でも弁護側の重要な論点の一つとなった。

しかし、裁判においては、植松の「刑事責任能力」のみに争点が絞られ、彼の人間性を広く深く掘り下げようという視点が欠けていた。

植松は、非常に多様な側面をもった人物である。友人関係はきわめて豊かで、女性関係にも不自由はなく、中学時代に二人、高校時代にも二人の交際相手があった。また、大学は帝

「植松は、不良グループの下っ端だった、という記事が報じられたことがあるんだけど、どうでした？」

私が尋ねると、X氏もY氏も、「俺たち、上とか下とかないですよ」「さと君は普通にいいやつ。一番最初に友だちができるっていえば、さと君だったよね」という。

大学デビュー

植松は、いわゆる「大学デビュー」であり、髪を茶髪に染め、友人とクラブ通いやナンパを繰り返すようになる。また、日焼けサロンに通い、大学二年の頃から脱法ハーブ、三年で初めて肩にイレズミを入れる。

大学の同級生のZ氏によると、「サトシは、昔から正義感の固まりで、虐待や性犯罪のニュースなんかを見ると、『許せない』って口に出すくらい……。ただ訳もなくキレる

ランプは真実を話している！」「これからは真実を語っていい時代なんだ」「俺が障害者を殺したらトランプは大絶賛するよ」などと友人に語り、自分をトランプ氏になぞらえて、救世主となる妄想を深めていく。

それに拍車をかけたのが、ネット空間だった。植松は「イルミナティカードに選ばれた」といういい方をしているが、ネットで知った「BOB (ボブ)」という伝説の指導者のカードに「3013」という数字があるのを見て驚愕した。逆から読むと「さとし(3・10・3+1)」と読めるといふのだ。実に奇妙なこじつけにすぎないが、植松は真剣にそう思い込む。

また、ヤフーニュースのコメント欄に書き込みを行い、「アフリカTV」という配信サイトに動画を投稿し始めた。今もユーチューブに一部が残っているが、「このままでは日本が滅びる」とカメラに向かって語る自身

を自撮りした動画である。そうした投稿動画や書き込みが、ネット世論の無責任な称賛を浴び、排外主義や自己責任論に代表される「ネトウヨ的思考」を先鋭化させていった。

そして二〇一六年二月、「私は障害者総勢四七〇人を抹殺することができます」という犯行予告めいた手紙を衆議院議長公邸に届けるのだ。

植松は、X氏にいったという。「俺は政府のかわりに殺すんだから、一生遊んで暮らせるだけの金がもらえるはず。百億円はもうよ」

またY氏はいふ。「その話を聞いたのはXが最初で、僕が二番目だと思うんだけど、そこから先の広がり方が尋常じゃなかった。三日くらいしたら、みんな知ってましたから」。

植松は、その犯行計画を約五十人もの友人・知人に話している。そして、誰が引き止めても納得せず、「ないで、なんで否定的なの？」とい

募った。さらに奇妙なのは、衆議院議長公邸に行った後、八王子市の両親宅を訪れ、犯行計画を打ち明けているのだ。「なぜ両親から止められたのにやめなかったんですか？」。

裁判官の質問に、植松はこう答えている。「何度も考えて、間違っているとは思えなかったからです」。

津久井やまゆり園の実態

ところで、やまゆり園で働き始めた当初、利用者のことを「かわいい」と語っていた植松が、やがて「この人たちには生きる意味がない」と思うようになったのはなぜなのか。

実は、植松の死刑確定から一年あまりが経過する中、一つだけ解明が進んだといえるのがこの問題、つまり、津久井やまゆり園の支援が抱えている問題点についてだ。

最初のきっかけとなったのは、裁

こともあって、怒り所がよくわからない不思議な感性の持ち主でした」

また、教員をめざす植松が、なぜイレズミを入れたのかについて、「かつこいいから、いいじゃんって。でも周囲にバレないように、サトシはすごい悩んでましたね。二の腕までならTシャツで隠れるか、とか」

植松特有の「かつこよき」への憧れ、「バレなきやいいじゃん」という、まじめさからの逸脱が、その頃から徐々に顕著になったようだ。

「さと君の脳味噌を最初にぶっこわしたのは、脱法ハーブだと思う」

幼なじみのY氏はいふ。脱法ハーブとは、大麻の幻覚成分に似た化学成分を添加した薬物で、規制薬物よりも毒性が強く危険な面もある。

「燃やすと、ゴムみたいになすこい。オイがするんで、僕らはだんだんやらなくなっただけですけど、さと君は長かったですね。大麻とは効き目も

全然違うんですけど、さと君はどっちも、好き派」だったんで」

植松は、脱法ハーブを四年以上は吸い続け、計算ができなくなったり、性格まで短気になるなど、その危うさを自らも自覚するほどだった。

また、Z氏によると、同じ大学の富裕学生たちとクラブのVIPルームを貸し切って遊んだり、高レートの麻雀をして借金を膨らませた。

「でも、そんな金は、何かやれば一発で返せるとかいつて」

その一つが、出会い系サイトで知り合った女性をA.Vに出演させようとしたことだ。「人間としてクズだぞってサトシにいったんですよ。結局彼女に逃げられたんですけど」。

トランプ現象

植松は大学で教員免許を取得したものの、「教師には向いてないわ」と

自ら教員の道をあきらめてしまう。そして運送業をへて、二〇一二年十二月、やまゆり園で働く地元の友人からの紹介で、園の非常勤職員となったのだ(翌年四月に常勤)。

ちなみに、やまゆり園は、神奈川の県立施設であり、その運営は「かながわ共同会」という社会福祉法人が指定管理者として行っている。

働き始めた当初の植松は、まじめで一生懸命。利用者のことを「かわいい」と語り、「この仕事は天職だ」というのを聞いた友人もいる。

そんな植松が、「障害者なんて、いらなくね？」と口に出しているようになったのは、二〇一五年六月頃。それは、ちょうどアメリカの不動産王ドナルド・トランプ氏が大統領選に出馬表明した時期と一致する。

植松は、連日テレビに映るトランプ氏の姿に強烈な印象を受けた。とりわけ排外主義的な言動に対し、「ト

判が始まる半年前の二〇一九年六月、NHK『おはよう日本』という番組による、やまゆり園の元利用者・松田智子さんについての報道だった。智子さんは、植松が五人を殺害したユニット(寮)で暮らしていたが、危うく襲撃をまぬがれた一人だ。

智子さんには重度の知的障害と行動障害があることから、やまゆり園にいた時代には、「見守りが困難」という理由で、車いすに長時間拘束されたままの生活を送っていた。

しかし番組内では、智子さんが事件後に、別の横浜市内の施設に移り、身体拘束を解かれると、足腰のリハビリをして歩けるようになったほか、地域の資源回収の仕事までできるようになったというのである。

私もまた月刊『創』を中心に、同じく植松の襲撃をまぬがれた平野和己さんという元利用者の動向を報じてきた。中でも、父親の平野泰史さ

んが、やまゆり園時代の和己さんの支援記録を取り寄せたところ、

「やまゆり園では、利用者の日中支援をほとんど行っておらず、行ったとしても暇つぶしのような単純な作業だけ。その他は放置のような状態で、とても利用者のことを真剣に考えているとは思えない」

泰史さんは、これまで園側に対し、日中支援の改善を何度も申し入れてきたが、「予算がない」「職員が少なくてできない」などを理由に、園側から退けられてきた経緯がある。

また、和己さんのいたユニットは、「刺激に弱い利用者が多い」との理由から、親さえ中に入ることは許されず、内部の透明性はゼロ。週末、泰史さんが和己さんに会いにいくと、入口に出てきた和己さんの全身から尿のニオイが立ち込めている。しかし、職員に聞いても、まともな回答は得られなかったという。

うような人もいる。だから、利用者さん本人を守るために車いすに縛りつけることは当然あります」

強度行動障害とは、自分の体を叩くなどの自傷行為や、異物を口に入れたり、物を壊して暴れるなどの他害行為が頻繁に起きる状態をいう。

「なんなら、自分の身を守らないと危ない。僕も夜勤のとき、突然部屋から出てきた利用者さんに殴られて口から血が出たり……。押さえて部屋に戻してカギを閉めてつてことが、けっこう日常茶飯事でしたね」

しかし、そもそも行動障害の背景には、その人特有の音や光、触覚などの感覚過敏などがあり、周囲に不安や不快感を伝えられないストレスが積み重なった結果と考えられている。このことは教科書の最初に載っているような基本中の基本だ。

つまり、そうした背景を的確に探つて対応するのが、プロの支援者の

すべきことなのだが、ただ縛ったり、閉じ込めたりするだけでは、行動はエスカレートする一方である。

しかし、先の中間報告書によると、やまゆり園では、「行動障がいのある人の支援について、エビデンス(科学的な根拠)に基づく適切なサービスを提供している」ということは確認できなかった」とあり、県の拠点施設としての機能をまるで果たしていないこともわかってきた。

適切な知識や技術、ビジョンなしに、強度行動障害に対応しようとするなら、職員が疲弊し、心身をすり減らしていくのも無理はない。

適切な支援とは

では、こうした問題にはいったいどんな解決策があるのだろうか。

現在、松田智子さんと同様、平野和己さんもやまゆり園を退所し、横

こうした告発が、神奈川県黒岩祐治知事を動かし、二〇二〇年一月、やまゆり園の実態を検証するための第三者委員会が発足。そして、裁判後の五月に『中間報告書』がまとめられた結果、長時間の居室施設や身体拘束など、やまゆり園の虐待事例の数々が明らかとなったのだ(その後、「障害者支援施設における利用者目録の支援推進検討部会」が発足)。

強度行動障害とは

やまゆり園は、知的障害の中でも特に対応が難しい「強度行動障害」のある利用者が多い施設である。

例えば、植松と同時期にやまゆり園に勤務していた元職員が、次のようにホンネを語ってくれる。

「一般社会の人は、信じられないと思いますけど、職員の手をガツと噛んできた、自分の目をえぐぐちゃ

浜市内の別の施設に移って生活している。私は、何度もその施設を取材に訪れているが、みんな朝九時過ぎになると、施設を出て法人内の作業所や、提携先のコープのリサイクルセンターなどへ出かけて行く。

私は、和己さんと一緒に夕方までリサイクル作業をして過ごしたが、荒れた様子を一度も見せることなく、フルタイムで作業して汗を流し、「お疲れさま!」といい合せて、とても満足そうな顔をしている。

私が取材した、やまゆり園の元職員が、「平野さんは最重度で、いったんスイッチが入ると、壁はポコポコにしちゃうし、もう止まらないんです」といつていたのが嘘のようだ。

人から「お疲れさま」といわれる体験はとても大切で、それによって自己肯定感が培われ、行動障害も徐々に少なくなっていくと、その施設長が話していたのが印象的だ。

支援の質が、その人の障害を重くもするし軽くもする。同じ設置基準に基づいて運営されているはずの障害者施設で、なぜこれほど支援の質に違いが生じるのか。今後メディアが報じ、社会に問いかけてはならないのは、この部分である。

植松聖のヒヤリハット

「これは植松が、やまゆり園時代に書いたヒヤリハットの報告書です」
私は思わず息を飲んだ。かながわ共同会の職員のQ氏が、事件の解明につながるの思いから、極秘に提供してくれた書類である。

「ヒヤリハット」とは、介護や医療分野で広く普及した取り組みで、現場でヒヤリとしたりハットとした事例を記録し、重大事故につながるよう、職員どうしで共有するための報告書だ。私が入手した植松の報告

書は二十一枚あり、実際の彼の仕事ぶりを知る上で重要である。

その一枚を紹介すると、事件の一年半前の二〇一五年三月、植松が入浴介助をしていると、利用者が突然、てんかん発作を起こし、湯船に沈みかけるアクシデントが起こった。それに気づいた植松は、すぐに利用者を抱きかかえ、救出処置を行った。植松は報告書にこう記している。

《14・53浴槽内にて発作を確認し、溺れている状況だったので直ぐに担ぎあげる。硬直痙攣20秒程みられる。脱力後脱衣場へ移動し、14・55ダイアップ（発作止めの座薬）を挿入する。15・00バイタルチェックを実施。kt（体温）37・5、BP（血圧）125/68、P（脈拍）110、その後、居室で横になって過ごしていただく。看護課に連絡し18・00に検温の指示がある》（カッコ内は筆者）
「これは、対応としてはどうなんで

すか？」とQ氏に尋ねると、「ほぼ百点満点だと思います」という。

私は、意外な植松の姿に接した気がして驚いた。ダイアップは発作を抑制する薬だが、一時的に血圧低下などが起こりやすく、バイタルチェックして園内の看護師に申し送る必要がある。植松はそれらもよく理解して適切な処置を行っている。

しかし、Q氏が気になっているのは、上司のコメントの方だという。全文を引用すると、《溺れるとは、広辞苑第三版によると、水中で泳げないで沈む、または死にそうになる」となります。今回の件を確認しましたが、浴槽内に頭部は浸かりましたが、直ぐに気付けたので水を飲むまでには至っておりませんでした。対応は迅速で賞賛すべき内容なのに、報告に「溺れている」との記載があるため重大な結果を招いてしまった、と思われてしまいました。今後は、

対応はそのまま、報告する際の記述に注意してください。》

一読しただけでは、その真意をつかみづらいが、要するに上司は、報告書に「溺れる」という言葉を使った点を問題にしているのである。

Q氏はいう。「本来であれば、よくやったね、利用者さんが無事でよかったね、とほめてあげるべきなのに、大きな言葉を使って必要以上に騒ぎ立てるな、という意味でしょ。上司がこの手の文体で書いてくるってことは、失態があると常に責められ、良いことをしても何もほめられないパターンだったんじゃないか」。

実はこの浴室での出来事は、植松にとつて大きな意味を持っている。植松は常々、「障害者はいらぬ」と思ったきっかけにこのエピソードを挙げ、「せつかく助けたのに、親御さんから感謝もされず、やはり障害者は不要な存在なんだと感じた」と語

っていたからだ。しかしそれ以前に、彼は上司の冷たい評価をどう受け止めたのか。「植松は職場で冷遇され、居場所を失っていたのではないか。そして彼の怒りの矛先は、職員ではなく、より立場の弱い利用者さんに向かっていったのではないか」。

事件の引き金

もちろん、私はやまゆり園だけに責任があるといいたいのではない。

植松の人間性を考えると、マンガやテレビ、ネットなどの言説に、いとも簡単に感化されてしまう側面がある一方で、いったん思い込んだら、他人の意見にまったく耳を貸さない頑固で攻撃的な側面を併せ持つ。こうした二面性は、現代のネット社会においては、ごく日常的に目につく普遍的な態度、思考様式といえる。「病氣じゃないですか、普通に。病

気だと思えますよ、オレは」

幼なじみのX氏という。植松は、これまで何度も精神鑑定を受けてきたが、あくまで「責任能力」が主眼の鑑定にすぎない。植松の急激な変容が、何らかの疾患の急性期にあたる可能性は消えたわけではない。

一方、Y氏という。「職場の環境も、脱法ハーブもイルミナティも、全部引つくるめたものじゃないかな」。

私もまったく同意見である。これまで語ったすべてのことが、あの時期の植松に集中的に作用し、事件の引き金を引かせたのではないか。

「でも記者の人って、何でそうなったかをすぐ決めたがるけど。自然になつたじゃダメなんですか？」

X氏にいわれて私は黙り込んだ。「誰だって、さと君みたいになる可能性はある。だから怖いんですよ」
額きながらも私は、まだ植松のことを何も知らない。そうも思った。